巻頭言

保育における〝におい〟を見直す

―バーチャルリアリティを超えて―

金田　利子

どんなしごとも、みんなにおいがありますよ
パンやさんは、メリケン粉とミルクのにおい
だいくさんのそばをとおると、かんなくずのにおい、のこくずのにおい
ペンキのにおいは、かんばんやさん
パテのにおいは、ガラスやさん
うんてんしゅさんのかわのジャケツは、ガソリンのにおい
こうばのしょっこうさんは、あぶらのにおい

お菓子屋さんは、おいしそうなミルクのにおい
おいしゃさんは、きもちのいいおくすりのにおい
はたけのにおい、土のにおいは、すきをウマでひかせるおひゃくしょうさんのにおい
さかなと海のにおいがするのは、おさかなやさん
なんのにおいもしないのは、しごとをしない人だけです

この詩は、今よりまだ生活のなかに仕事の姿があった頃に、〝におい〟についてうたったイタリアのジャンニ・ロダーリという詩人の作品の一部（西郷武彦訳）である。

近年、「子どもたちの体験が、バーチャルが中心になり、直接体験が少なくなってきている」と言われ、そのことが問題になってきている。一方、「人権とは想像力である」とも言われ、実際に体験しなくとも体験しているかのように他者の立場に立てる想像力が「共生」の基本になるということもまた事実である。想像力を育てるには、まず直接体験が必要であり、それなしの、視聴覚メディアによる間接体験だけでは、真の感性が芽生えず、知的好奇心も想像力も育ちにくいからこそ問題になっているのだと考えられる。

では、バーチャル体験では得られない感覚は何か。それは、五感のうち視聴覚より

も、もっと下位のレベルにある触覚、味覚、嗅覚による体験ではないか。一般的には、下位のものが前提になって上位のものが発展する（二足歩行が基盤になって、指差しなど手指の力が育ち、それが前提となって言葉が形成されていくように）。感覚も、触・味・嗅覚が前提となって視聴覚の世界をリアルなものにすることができる。実際、生活がこうした下位の感覚が交差した関係で成り立つとき、リアリティをもち、想像力の基礎になる。味覚は実際に味わってみてこそ、触覚もまた、触ってみてこそ機能する。

ここでは、保育の中で、比較的対象化されることの少ない、しかし、関係者が気づいているよりも強烈なもののある嗅覚の働きによる〝におい〟について取り上げたい。

次は、最近筆者が講師となった放送大学静岡学習センターの面接授業の中で、最近の子どもの状況について、受講生（四十九歳・男性）の提出した感想文の一部である。

「……現代っ子は、何でも映像では知っているが、実体験が乏しい。私の例で言えば、羊は写真で見て知っていたが、忠ちゃん牧場（静岡県内）で羊を見たとき、ものすごい糞の臭いでぶっ倒れそうになった。写真や言葉では、この糞の臭いは体験も表現もできない。（現在壮年期にある自分の子どもの頃でさえ、そうなので）今の子どもたちの多くは、『直接体験障害』と言えるのではないか」

ぶっ倒れそうな糞の臭いや、一方では、さまざまな草木の花・果物の匂いがあり、それらが交じり合って、自然の、それもそれぞれの季節の〝におい〟を嗅ぎ分けられると

ころに生命の妙味と喜びがある。大分前の秋、富士宮市の野中保育園に院生たちと訪れたとき、一人が開口一番「この園にはいろいろな〝におい〟がある。コスモスの香、諸動物（山羊・鶏他）や土・草木の匂いが入り混じって何とも不思議な〝におい〟がある」と。

そしてさらに見ていくと、保育における〝におい〟は室外の自然環境だけではない。子ども一人一人に〝におい〟がある。ある一歳児クラスでのこと、記名のない衣類の持ち主を探しあぐねている保育者に、子どもたちは、〝におい〟で嗅ぎわけ、正確に示してくれたという。親しくなると、姿は見えなくても声だけで誰とわかる。なんと、ここでの子どもたちは〝におい〟だけで、誰と識別できる。園においては、言葉以前の子どもたちが、〝におい〟を通して互いの人格・存在を尊重しあえていることを示している。

幼い頃からさまざまな人のさまざまな個性につながる〝におい〟に接し、それぞれを尊重する体験は共生観を育成する上での基盤ともなろう。

ここで、先のロダーリの詩に戻ってみたい。この詩から、〝におい〟は、自然の生命そのものの息づかいであるとともに、自己の生命を燃焼させ、その成果を他者と自己の生命に活かすという人間独自の社会的活動である「仕事」にまで発展させるとき、人間・人格を象徴するものになることがしみじみと伝わってくる。自分らしく生きること、それは自分独自の〝におい〟を持つことに、また、他者のそれを尊重する「共生」

につながる。

四月、「はずむ」心で、春を探しに散歩するときにも、視聴覚だけでなく、触・味覚とともに、そこにあるいろいろな〝におい〟も、一緒に探す実践もあろう。四、五歳児にもなると、「何だか春の〝におい〟がするね」などと言う子もいるに違いない。野原など側にない都会でも、街路樹に目をやると、それでもどこか春の〝におい〟を見出せるだろう。

人格の点で言うと、「自分の〝におい〟が移りすぎるので、『担当制』は不安」と言う保育者に出合うことがあるが、何の〝におい〟もしないよりは、思いっきり〝におい〟と〝におい〟をぶつけ合って、自分のグループらしい〝におい〟ができるとき、そして、そうした個性が交じり合って園の保育の〝におい〟になっていくとき、生命のひびきを直接に感じあえる人間性豊かな保育が展開できるのではないだろうか。

バーチャルリアリティ化が問題になっている今日、実体験でしか得られない下位感覚の働き、とりわけ、自然から人格・人権まで総合的な意味をもつ、〝におい〟にもっと光を当てた保育が自覚化されてもよいのではないかと思う昨今である。

（静岡大学）